

(8) 北海道本別高校の資料

- 本 1 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》
- 本 2 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》
- 本 3 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）
- 本 4 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）
- 本 5 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）
- 本 6 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）
- 本 7 全道地学協働活動研究大会発表資料
- 本 8 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）

資料 本 1

令和 3 年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（1 年次）《第 1 次》

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和 3 年 6 月 30 日

1 課題把握

(1) これまでの学校と地域の関係・取組

- ・令和元年度より「総合的な探究の時間」を実施し、本別町教育委員会とPTAの協力で、特産品カレー作りを行った。
- ・令和2年度より学校運営協議会との協働により「総合的な探究の時間」を行っている。本別町教育委員会の社会教育主事がコーディネーターとして学校と地域をつなぎ、地域人材がコーチとして生徒の探究活動をサポートできる体制を整えた。

(2) 現状における課題

- ・学校とコーディネーターが連携して「総合的な探究の時間」の年度計画や実施方法の工夫・改善を行いながら、系統のかつ継続的な活動とするための体制の構築が必要である。
- ・生徒の学びについて、生徒の地域の現状分析が十分ではないため、探究活動初期の段階において、課題設定までの時間が費やされている。
- ・地域課題に係る探究活動について、生徒及びコーチが試行錯誤しながら取り組んでいることから、計画的なコーチの研修や適切なアドバイスができる専門家からの助言や協力が必要である。

2 仮説検討・テーマ設定・目標設定

(1) 研究仮説

- ・生徒とコーチが協働で地域の課題に取り組むことにより、地域における創り手を育成することができる。
- ・地域に関する探究活動を通して、生徒の自己肯定感や自らキャリアを切り拓き、育成すべき資質・能力の向上を図ることができる。
- ・生徒がよりよい町づくりを議論することを通して、地域住民がより町づくりに関心を持ち、町の活性化を図ることができる。
- ・生徒の変容について、育成を目指す資質・能力に関するアンケートを取り、経年変化について検証する。
- ・コーチにアンケートを実施し、生徒及び自身の意識や思考の変容があったか検証する。

(2) 研究テーマ

- ・正解のない課題に挑戦し探究し続ける力の育成
- ・次世代に十勝を牽引し地域を支える力の育成
- ・グローバルな視点をもって地域を支える人材の育成

資料 本 1

(3) 今年度の目標

- ・育成を目指す資質・能力に関するアンケートで自己評価の肯定的意見の割合の増加（各資質・能力について「身についた」と自己評価した割合が半数以上）

3 研究の具体

(1) 研究内容（選択する項目を■にしてください）

- 「Collaboration」【地域・産業界等との連携・推進】
（内容）・総合的な探究の時間において、推進校と協働して、地域の教育資源の活用における取組の成果を推進校と交流したり、意見交換を行い地域との連携についての改善・充実を図る。
- 「Literacy」【学んだことを将来に生かす能力】
（内容）・育成すべき資質・能力を柱として、1、2年生において、総合的な探究の時間を教科の枠組みにとらわれず、様々な分野を横断的に統合させながら、地域理解や課題について探究的な学びのサイクルを構築する。
- 「Adult」【多くの大人が子どもと一緒にあった取組の推進】
（内容）
- 「Student」【生徒理解に基づく指導の充実】
（内容）
- 「System」【学校と地域の連携・協働の仕組みづくり】
（内容）

(2) 研究成果の普及方法

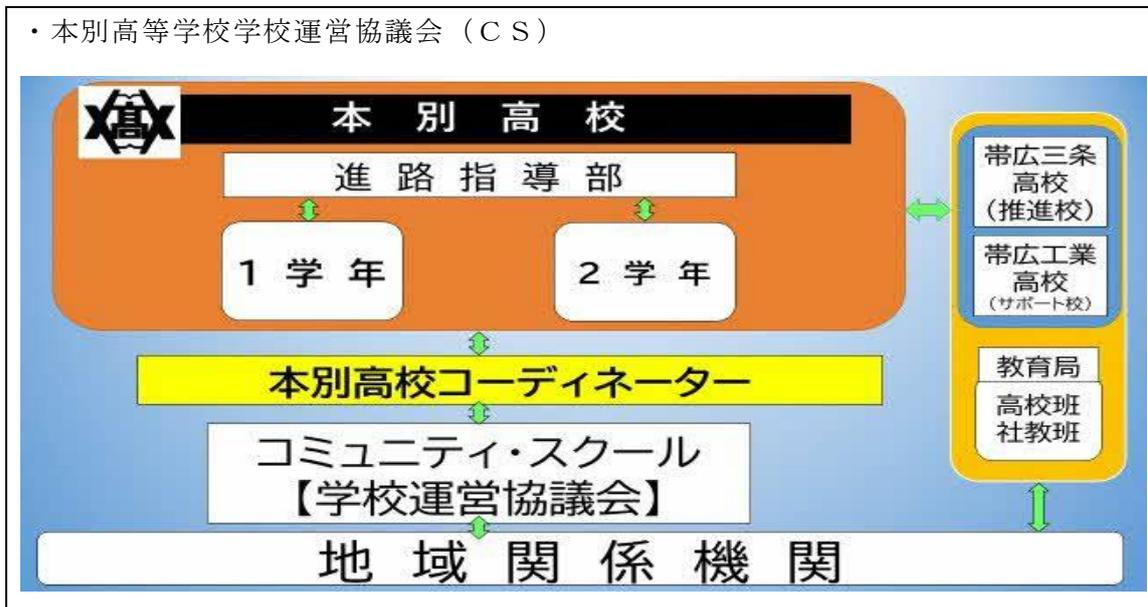
- ・地域や各種発表会の場で、研究成果報告会を開催し研究成果を発表する。
- ・研究成果を YouTube で配信し、関係者を限定として成果を普及する。
- ・研究成果報告書を作成して関係者に配付するとともに、学校HP上で公開する。

(3) 研究のイメージ（概要等）

資料 本 1

(4) 研究組織

① コンソーシアム構成図



② 校内体制

職 名	氏 名	担当教科・分掌等
校 長	松田 素寛	
教 頭	沼澤 圭亮	
教 諭	福地 成海	家庭科・教務部・1年担任
教 諭	河西 未来生	音楽・進路指導部・2年担任
教 諭	田原 泰	理科・進路指導部長

4 その他特記すべき事項

特になし

資料 本 2

令和 3 年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（1 年次） 《第 2 次》

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和 3 年 9 月 30 日

1 3 年間の目標

<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校が、地域振興の核となり、地域の大人とともに議論し、地域の未来を支えるリーダーを育成する。 ・ 生徒が地域はもとより、グローバルな視点を持って、コミュニティを支える人材となる。 ・ 地域コーディネーターとの連携・協働する体制を構築する。

2 年次ごとの目標と取組計画

月	取 組
1 年次 (R3)	(目標) ・ 探究活動に係るコーディネーターの役割の明確化 ・ 地域人材 (コーチ) の役割の明確化 ・ 校内組織の構築 (主な取組) ・ 探究活動の地域課題解決策を実現に導く関係機関との協議 ・ オーストラリアミッチェル市との生徒交流 ・ 生徒プロジェクトの議会提言 (検証の項目) ・ 全ての学習活動におけるグループ協議の活性化 ・ 地域人材 (コーチ) との議論回数 (頻度) の増加 ・ 英語検定合格率 30% ・ 探究活動実施前後における、育成を目指す資質・能力 (自己評価項目) の自己肯定評価の変容
2 年次 (R4) 【予定】	(目標) ・ 探究活動に係るコーディネーターの役割の確立 ・ 地域人材 (コーチ) の役割の確立 (主な取組) ・ 探究活動の地域課題解決策を実現に導く関係機関との協議 ・ オーストラリアミッチェル市との生徒交流 ・ 生徒プロジェクトの議会提言 ・ 各種研究大会等への参加 (高校生探究サミット、地方創生政策アイデアコンテスト、マイプロジェクトなど) (検証の項目) ・ 全ての学習活動における、グループ協議の活性化 ・ 地域人材 (コーチ) との議論の回数 (頻度) 増加や質的向上 ・ 英語検定受検者数の増加と合格率 30% ・ 課題設定における継続取組率 10% 以上。 ・ 探究活動実施前後における、育成を目指す資質・能力 (自己評価項目) の自己肯定評価の変容
3 年次 (R5) 【予定】	(目標) ・ コーディネーター、地域人材 (コーチ)、教職員一体となった組織的活動の実践 (主な取組) ・ 探究活動の地域課題解決策を実現に導く関係機関との協議

資料 本 2

	<ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリアミッチェル市との生徒及びコーチの交流 ・ 生徒プロジェクトの議会提言 ・ 各種研究大会等への参加（高校生探究サミット、地方創生政策アイデアコンテスト、マイプロジェクトなど） <p>（検証の項目）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全ての学習活動における、グループ協議の活性化 ・ 地域人材（コーチ）との議論の質の向上 ・ 英語検定受検者の増加と合格率 40% ・ 探究活動実施前後における、育成を目指す資質・能力（自己評価項目）の自己肯定評価の変容 ・ 自己肯定感及び社会形成参画意識の向上
--	---

3 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
育成を目指す資質・能力の自己評価	事前・事後アンケート
グローバル人材の育成	英語検定者数及び合格率 大学の総合政策学部や国際関係学部などの進学者数
グループ協議の活性化及び地域人材（コーチ）との議論の頻度と質的向上	課題に対する論理的思考（ロジックツリー作成）の確立 地域人材（コーチ）のアンケート

4 今年度（令和3年度）の計画

月	取 組
5 月	「20年後も魅力的なまち本別について」パネルディスカッション
5 月	コミュニティ・スクール会議
5 月 6 月	地域 PR 動画・SNS 作成講義（十勝毎日新聞木村氏、十勝毎日新聞折原氏）
6 月	2 学年中間発表会
7 月	1・2 学年フィールドワーク
8 月	2 学年マーケティング講話（シルバーブルーム代表 佐藤真康氏）
8 月	1 学年中間発表会
9 月	2 学年 3 / 4 発表会
10 月	1 学年議会見学
10 月	1 学年インターンシップ
10 月	1 学年成果発表会
11 月	コミュニティ・スクール会議②
11 月	2 学年成果発表会
12 月	2 学年議会提言
12 月	1 学年探究プロジェクト課題設定
2 月	コミュニティ・スクール会議②

資料 本 2

5 その他特記すべき事項

- ・「総合的な探究の時間」総合アドバイザーとして、一般社団法人 地域包括ケア研究所 代表理事 藤井雅巳氏からの指導・助言
- ・町内菓子店と共同で、本別カレーに続く新たな新商品開発の取組

資料 本 3

令和 3 年度 北海道CLASSプロジェクト実施報告書（1 年次）

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和 4 年 3 月 18 日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	育成を目指す資質・能力の自己評価
	検証の方法	事前・事後アンケート
	検証結果	<p>判断力：新しい知識を身に付けることに強い意欲を持っている。 「強く思う」「思う」の人数、5月17名、11月22名</p> <p>発信力：意見や考えを相手にわかりやすく表現する力が身に付いた 「強く思う」「思う」の人数、5月11名、11月14名</p> <p>表現力：考えや思いを言葉や文章などでわかりやすく表現する力が身に付いた 「強く思う」「思う」の人数、5月11名、11月17名</p> <p>【判断力】【発信力】【表現力】については上記のように向上が見られた。しかし、【協調性】や【自己効力感】については、横ばい及びやや下降している。これについては、課題設定時のグループ内協議が重要と思われる。</p>

②	検証の項目	グローバル人材の育成
	検証の方法	英語検定受検者数及び合格率 大学総合政策学部や国際関係学部などの合格者数
	検証結果	<p>英語検定について総受検者数は30名。2級合格が全体の1.1%だったが準2級合格が11.1%と高い水準だった。</p> <p>大学進学について、総合政策学部等の進学者はいなかったが、英文学科2名、海外大学進学（オーストラリア）1名となった。また、公務員合格が1名だった。</p> <p>以上のように、グローバルな視点を持って、授業などに取り組むことで、グローバル人材が着実に育っている。</p> <p>また、3年連続で本別町役場に採用され、地域行政サービスを通して、地方創生に取り組んでいる。その中から、本校の「とかち創生学」のコーチとして、授業に参加したいと強く望んでいる生徒がいる。</p>

③	検証の項目	グループ協議の活性化及び地域人材（コーチ）との議論の頻度と資質向上
	検証の方法	課題に対する論理的思考（ロジックツリーの作成）の確立 地域人材（コーチ）のアンケート

資料 本 3

検証結果	生徒の課題に対する論理的思考は非常に高まっており、地域人材（コーチ）のアンケートからも確認することができる。（別紙参照）
------	--

2 今年度（令和3年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		・地域人材を活用したパネルディスカッション（5月） ・地域 PR 動画、SNS 作成講義（十勝毎日新聞記者）（6月） ・2 学年総合探究中間発表会（6月） ・1・2 学年総合探究フィールドワーク（7月） ・1 学年総合探究中間発表（8月） ・2 学年3 / 4 発表会（9月） ・1 学年議会見学（9月） ・1 学年総合探究成果発表会（10月） ・2 学年総合探究成果発表会 ・2 学年総合探究議会提言
5	第1回学校運営協議会	
6	関係者打合せ	
7	関係者打合せ	
8	関係者打合せ	
9	関係者打合せ	
10	関係者打合せ	
11	第2回学校運営協議会	
12	関係者打合せ	
1	関係者打合せ	
2	関係者打合せ	
3	第3回学校運営協議会	

3 組織化に関する検証【推進校のみ】

※推進校のみの記入ではあるが、連携校から下記のとおり情報提供があった。

(1) コーディネーター選出の方針【教育局記入】

(2) コーディネーター選出の方法【教育局記入】

(3) コーディネーターとの連携

総合的な探究の時間における、地域との連携におけるコーディネート。

- ・教頭、コーディネーター、総合探究アドバイザーと LINE グループを活用して、連絡を密に取った。
- ・Zoom を活用して、東京在住の総合探究アドバイザーとの打合せを行った。

(4) コンソーシアム設置に関わっての方針

地域で活動する団体等に学校から説明をし、了承していただいた上で選出

資料 本3

(5) コンソーシアム設置に関わっての方法

学校運営協議会を活用して、コンソーシアムを設置した。
 コンソーシアムメンバーは学校から役割を説明し、了承を得た。メンバーは以下のとおり。
 本別町教育委員会教育長、本別町教育委員会職員（コーディネーター）、本別町商工会議所青年部長、本別農業協同組合青年部、本別高校の教育を考える会（本別高校後援会）、PTA会長、元PTA役員、本別町立本別中学校長、本別町立本別中央小学校長

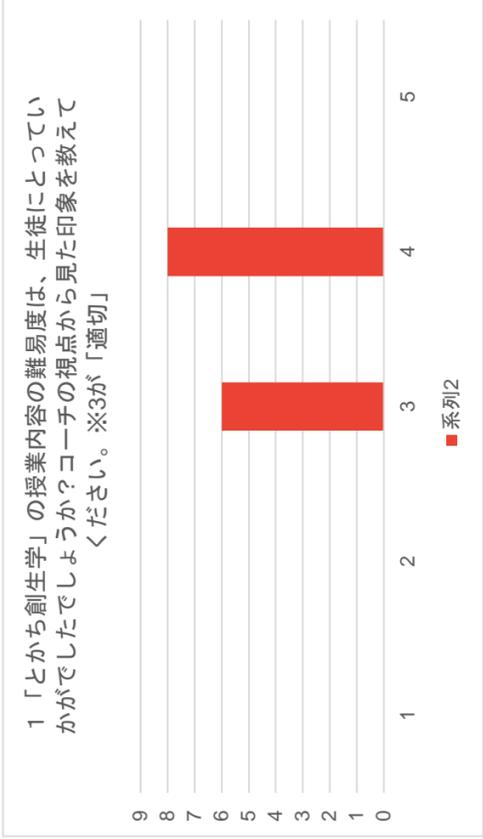
(6) コンソーシアム会議における議題

第2回学校運営協議会議事録
 第3回学校運営協議会議事録

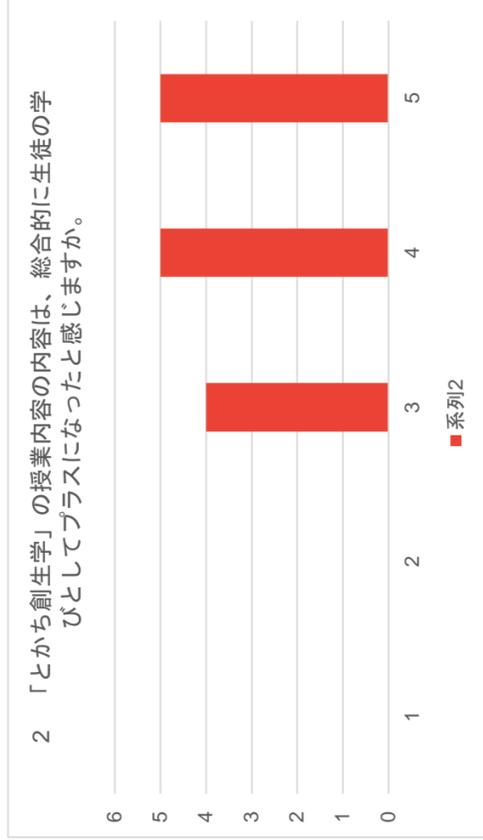
4 組織化以外の成果等

・町内菓子店と共同で商品開発を取組中。令和4年7月の学校祭で発売を目指す。

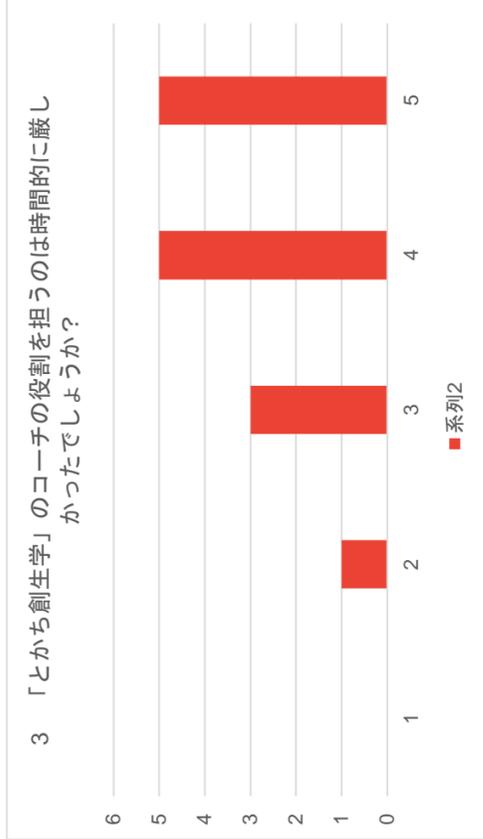
1 「とちかち創生学」の授業内容の難易度は、生徒にとっいていかがでしたでしょうか？コーチの視点から見た印象を教えてください。※3が「適切」	1	0
	2	0
	3	6
	4	8
	5	0



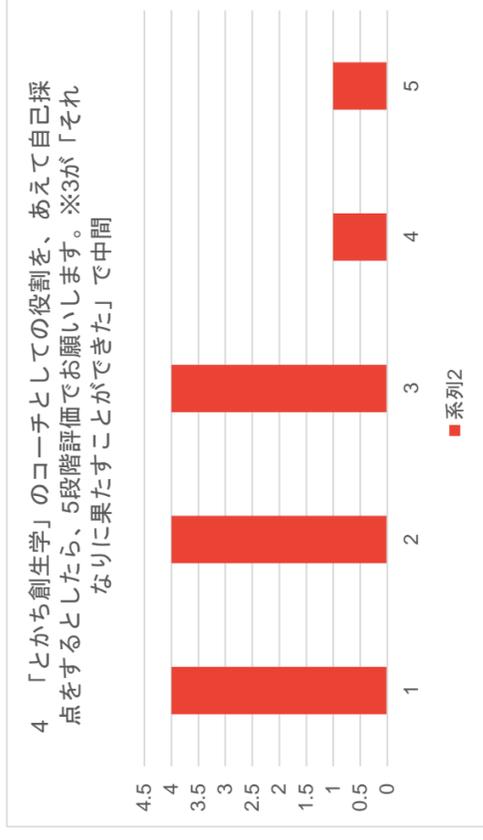
2 「とちかち創生学」の授業内容の内容は、総合的に生徒の学びとしてプラスに感じますか。	1	0
	2	0
	3	4
	4	5
	5	5



3 「とちかち創生学」のコーチの役割を担うのは時間的に厳しかったでしょうか？	1	0
	2	1
	3	3
	4	5
	5	5



4 「とちかち創生学」のコーチとしての役割を、あえて自己採点をするとしたら、5段階評価でお願いします。※3が「それなりに果たすことができた」で中間	1	4
	2	4
	3	4
	4	1
	5	1



コーチとして一つ特	1	4
に印象に残った具体	2	4
的なエピソードを教	3	4
えてください	4	1
	5	1

コーチとして一つ特
に印象に残った具体
的なエピソードを教
えてください

スマホを使ってGoogleフォームでアンケートをサクサク作っていたこと。
アンケートや聞き取り調査など、やるべき事が決まると、行動までがとでも早く、軽率な点もあるかもしれないが、見習うべき点も多くあると感じた。
生徒の発言から、意外とわたしたちは自分たちが住んでいる町について知らないと感じたとき
当初おとなしい印象を受けた生徒が、最後にはリーダーのように一番頼もしく積極的な姿勢に変化したこと。
発表会での表現力
高校生の内から社会のマナーなどを守って計画的に実行すること
なかなか全員が揃わなかったことで一人の生徒への負担が大きかったように感じました
あまり授業に参加できなかったため特になし
本別町居住支援協議会での発表
生徒たちとのやり取りというより授業にほぼ参加できず求められるコーチの役割が果たせなく申し訳なかったという気持ちしか残っていません。
最終発表のスライイドが高校二年性とは思えないほどわかりやすくまとめ上げられていたこと。
生徒たちだけでフィールドワークにいかせてしまったこと。学校の授業のひとつとしての取り組んでいる中で、今回は事故等はなかったかもしれないけれど、今後同じように行かせていいのでしようか。やはり私たちコーチも含めて大人も行くべきだったのではないかと考えています。
生徒がパワーポイントを自由自在に使いこなしていた事
生徒が最後まで、芯の通った物語ができなかった。最初の頃のアイスブレイクが長過ぎたのか、逆に個々の思惑(アイデア等)の擦り合わせが不十分だったことが要因と考えられる。



本別高校

進路指導部



1 学年



2 学年



本別高校コーデイネーター



コミュニティ・スクール
【学校運営協議会】



地域関係機関

帯広三条
高校
(推進校)

帯広工業
高校
(サポート校)

教育局
高校班
社教班



資料 本 4

令和 4 年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（2年次）

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和 4 年 6 月 15 日

1 今年度の目標と取組計画

月	取 組
2 年次 (R4) 【予定】	(目標) ・ 探究活動に係るコーディネーター、コーチの役割の確立 ・ 教科横断的な生徒の主体的学び推進 ・ 探究活動による学びとその成果の深化 (主な取組) ・ 地域の魅力に係る探究活動における関係機関との協議 ・ 地域課題解決策に係る探究活動における関係機関との協議 ・ オーストラリアミッチェル市との生徒交流 ・ 地域課題に係る議会提言等、「実践と検証」の場の提供

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
育成を目指す資質・能力の自己評価	事前・事後アンケート グループ内の活動振り返りシート
グローバル人材の育成	英語検定等、各種検定試験の受検者数及び合格者数/GTECスコア 大学の関係学部等進学者数
生徒の協働意識及び主体性の変化	課題に係る地域人材のアンケート
探究活動の系統化	コーディネーター、コーチとの協議

3 今年度（令和 4 年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	総合探究打合せ	・ 新商品開発プロジェクト（4～6月）
5	総合探究打合せ	・ トークフォークダンス（5月）
6	第 1 回学校運営協議会会議	・ 地域PR動画作成講義（6月）
7	総合探究打合せ	・ 総合探究 2 年中間発表（6月）
8	総合探究打合せ	・ 探究活動フィールドワーク（7～8月）
9	総合探究打合せ	・ 総合探究 1 年中間成果発表（8月）
10	総合探究打合せ	・ 総合探究 2 年発表（9月）
11	第 2 回学校運営協議会会議	・ 総合探究 1 年成果報告（10月）
12	総合探究打合せ	・ 1 年インターンシップ（10月）
1	総合探究打合せ	・ 総合探究 2 年成果発表（11月）
2	関係者総括会議	・ 総合探究 2 年議会提案（12月）
3	第 3 回学校運営協議会会議	・ 総合探究 2 年論文作成（12月）

資料 本 4

4 小・中学校との連携を強める取組

- ・ 近隣小中学校の学校運営協議会委員が高校の探究活動を視察する
- ・ 学校運営協議会会議でコーディネーターが高校の取組を説明する
- ・ 高校生が、近隣の小中学生及び保護者に総合的な探究の時間の取組内容を紹介する
- ・ 高校生がコーチとなり、小学生の科学的な探究活動を支援する

5 その他特記すべき事項

- ・ 「総合的な探究の時間」総合アドバイザーとして、一般社団法人地域包括ケア研究所代表理事藤井雅巳氏からの定期的な指導及び助言を得る
- ・ 町内菓子店や地域おこし協力隊と高校生が協働して行う、探究活動の課外への広がりとしての地域特産品を使用した商品開発

資料 本5

令和4年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（2年次）

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和5年3月17日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	育成を目指す資質・能力の自己評価
	検証の方法	事前・事後アンケート
	検証結果	<p>・「身に付いている力」について、1年生は今年度6月と11月の比較、2年生は前年度5月と今年度11月の経年比較を行った。</p> <p>【1年生】実行力、行動力、人間関係形成力において、「強く思う」「思う」と回答した人数が増加した。</p> <p>【2年生】判断力、表現力、チャレンジ精神、リーダーシップにおいて、「強く思う」「思う」と回答した人数が増加した。</p> <p>【共通】自己効力感、傾聴力において、「強く思う」「思う」と回答した人数が増加した。</p> <p>1年生の活動で、実行、行動しながら人間関係を構築する力、さらに活動の継続によって判断力、表現力、チャレンジ精神やリーダーシップを身に付けており、自己効力感が高められている。</p> <p>この結果から、1年次からの継続した活動が、本校が目指す資質・能力の育成につながっている。</p>

②	検証の項目	グローバル人材の育成
	検証の方法	英語検定等、各種検定試験の受検者数及び合格者数/GTECスコア 大学の関係学部等進学者数
	検証結果	<p>・英語検定の総受検者数25名、昨年度から5名減。準2級では合格者2名と昨年度から8名減っているが、2級は3名合格と昨年度から2名増加した。</p> <p>・GTECスコアは、大きな伸びは見られていない。海外研修との関連性を強めることで語学力の重要性を高めるとともに、さらなる授業改善が課題となる。</p> <p>・進学先は、地域政策系学科への進学者2名、経済系学部へ進学者で、将来は地域に戻り起業するという目標を持つ者がいる。また、公務員及び民間就職では、管内に留まらず広い視野をもって進路選択をする者が増加した。</p> <p>・コロナ禍のためオーストラリア国内代替研修を実施し、英語の学習に対する学習意欲を高める効果があった。また、JICA研修員との交流は、生徒に広い視野を持たせることができた。次年度以降の海外研修の充実に向けた取組として、効果的であった。</p>

資料 本5

③	検証の項目	生徒の協働意識及び主体性の変化及び探究活動の系統化
	検証の方法	課題に係る地域人材のアンケート コーディネーター、コーチとの協議
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を捉える判断力が高まり、RSASE などの統計データや聞き取り、アンケートによる情報収集が行われている。その上で、相手に意識を持ちロジカルに表現する力を身に付け、主体的に新たな活動に粘り強く取り組む姿勢が読み取れる。 ・ 【地域の大人たちと協力した教育活動】の項目 「十分達成できている」と「概ね達成できている」との回答が、生徒 94.5%、探究コーチ 100%となっている。生徒は班員やコーチとの議論の必要性や意義を感じ、自ら発信する姿勢及び主体性や協働性の大切さを実感している。

2 当事者の声について

生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の学校評価アンケートにおいて、 【学校外の地域の人たちから成長を助けてもらっているか】の項目 「十分達成できている」と「概ね達成できている」を合わせ 94.4%となっている。 ・ 【将来地元で貢献したいと思っているか】の項目 「とても思う」「思う」を合わせて 44.4%であるが、地域と協働した学習活動が、一定程度地元への愛着につながっている。 ・ 北海道 CLASS プロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」、議会提言をはじめとする外部の活動に参加し、他校との交流や外部からの指摘を経験することにより、課題に対する捉え方や新たな視点に対する捉え方など、活動の意義を実感することができた。 (CLASS プロジェクト交流会参加者から)
教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の成長のために役立つため、より活動を全体の取組とする必要がある。 ・ 探究コーチの存在は、生徒が日常的に外部の大人と関わることで成長できる。教員の業務負担軽減にもつながっている。 ・ コーチとの課外活動は、多くの視点を与えるとともに進路学習意識の向上につながった。 ・ 外部での発表により、参観者や助言者から活動への評価を受けることや生徒間の交流により、生徒の自己肯定感を高められている。議会提言や他校との発表交流は、多様な価値観を生み出している。 ・ 北海道 CLASS プロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」、標津高校との探究交流会に出席したグループは、地域の特色や科学的な視点も得られるなど、他校の実践に触れることで刺激を受け、思考を広げるとともに、本校の活動の必要性を改めて実感している。 (CLASS プロジェクト交流会参加者、標津高校との探究交流会参加者から)

資料 本5

地域の方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域関係者の学校評価アンケートにおいて、 【地域の大人たちと協力した学習活動】の項目 「十分達成できている」が 65.2%、「概ね達成できている」が 34.8%と合わせて 100%となっている。 【小中学生との交流】の項目 「十分達成できている」と「概ね達成できている」を合わせ 78.2%となっている。 【国際理解やグローバルな視点を養う教育活動】の項目 「十分達成できている」と「概ね達成できている」を合わせ 91.3%と高い。 ・ 上記のとおり、関係者には、学校の教育活動が概ね適切に評価されている。活動をより広く理解してもらうための取組を広げてほしい。
------	---

3 今年度（令和4年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	総合探究打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新商品開発プロジェクト (4～6月) ・ トークフォークダンス (5月) ・ 地域PR動画作成講義 (6月) ・ 総合探究2年中間発表 (6月) ・ 探究活動フィールドワーク (7～8月) ・ 総合探究1年中間成果発表 (8月) ・ 総合探究2年発表 (9月) ・ 総合探究1年成果報告 (10月) ・ 1年インターンシップ (10月) ・ 総合探究2年成果発表 (11月) ・ 総合探究2年議会提案 (12月) ・ 総合探究2年論文作成 (1月) ・ 標津高校との探究交流会 (1月)
5	総合探究打合せ	
6	第1回学校運営協議会会議	
7	総合探究打合せ	
8	総合探究打合せ	
9	総合探究打合せ	
10	総合探究打合せ	
11	総合探究打合せ	
12	第2回拡大学院校運営協議会会議 北海道 CLASS プロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」	
1	総合探究打合せ	
2	関係者総括会議	
3	第3回学校運営協議会会議	

4 小・中学校との連携を強める取組について

<ul style="list-style-type: none"> ・ 長期休業期間に、町内3小学校の児童に対して高校生が学習サポート活動を行い交流した。(7月26～28日, 12月26～27日) ・ JICA研修員との交流事業で、小学生とJICA研修員との交流機会を設け、高校生が小学生に理科実験の指導を行った。(12月5日) ・ 本別町サイエンスクラブと協力し、本別町理科プロジェクトの取組として、高校生が小学生に理科実験の指導を行った。(10月28日, 12月17日) ・ 高校生がSDGsカードゲームの授業を企画し小学生と交流した。(12月9日)
--

資料 本 5

- ・ 中学校の進路学習に高校生が講師として協力した。（2月10日）
- ・ 学校運営協議会で高校の取組を説明し、小中学校から意見聴取した。

5 学校独自の取組・工夫・実践について

(1) 組織化に関する取組・工夫・実践（校内体制含む）

- ・ 第2回学校運営協議会を拡大開催し、町議会議員等から広く意見聴取する機会とした。（12月8日）
- ・ 町広報誌等を活用し、町民から「探究サポーター」を募集
- ・ 探究イベント「とかち創生学の日」を開催し、地域住民、教職員等の理解促進を図る
- ・ 令和5年度から探究活動に係る校内委員会を定期開催し、計画的運営体制を強化する。

(2) 地域コーディネーターとの連携に関する取組・工夫・実践

- ・ 探究総合アドバイザーと高校の打合せへの地域コーディネーターの参加
- ・ 探究コーチの選定や依頼に係る業務の地域コーディネーターへの移行

(3) その他

- ・ 昨年度からの放課後 SOY クラブの活動とふるさと納税返礼品への採用

資料 本6

令和5年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（3年次）

学校名	北海道本別高等学校
作成日	令和5年4月24日

1 今年度の目標と取組計画

月	取組
3年次 (R5)	(目標) 持続可能な地学協働体制の構築 ・コンソーシアムの構築と活用 ・探究活動における「実践と検証」の取組の活発化 ・教育活動の情報発信における関係機関との連携体制の強化 ・探究活動による学びとその成果の深化 (主な取組予定) ・探究活動及び地域連携に係る校内担当者とCSコーディネーターの定期的な打合せ ・学校運営協議会への地域魅力化に係る研修的要素の設定 ・本校発表会へのCLASSプロジェクト関係者の参加及び指導・助言及び地域課題に係る議会提言等、「実践と検証」の場の提供 ・オーストラリアミッチェル市との生徒交流に係る関係機関との連携

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
Collaboration ・生徒と地域人材の連携の推進 ・他校との交流等による生徒の変容 ・学校・地域・関係者の協働	・事前・事後アンケート及び学校評価アンケートの「地域の大人たちと協力した教育活動」の項目の比較と考察 ・CLASSプロジェクト指定校の交流会、各種大会等への参加者からのアンケート及び聞き取り ・第3回学校運営協議会における委員及び関係者からの意見聴取
Literacy ・探究活動による生徒の変容 ・探究的学びの教科横断的広がり ・主体的に学び続ける姿勢	・事前・事後アンケートの「思考力」「判断力」「課題発見力」「発想力・課題解決力」の項目の前後・経年比較 ・生徒の探究活動、各教科・科目の「振り返りシート」及び教員・探究コーチのアンケートによる評価 ・オーストラリアミッチェル市との生徒交流の事前・事後アンケートによる探究的学びの成果活用状況
Adult ・地域への参画意識の変化 ・地域の大人の当事者意識の変化 ・協働による実践とその成果	・生徒アンケートの「地域の大人たちに支えられている」「将来、地域に貢献したい」の項目の前後・経年比較 ・探究コーチ・関係者アンケートの「地域の大人たちと協力した学習活動」の項目の経年比較及び傾向分析 ・地域人材と協働して課外活動を行った生徒への聞き取り及び教員アンケートによる自己評価

資料 本6

<p>Student</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者尊重により自己理解を深め、自ら成長しようとする姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前・事後アンケートの「チャレンジ精神」「協働力」「リーダーシップ」「人間関係形成力」「協調性」「自己効力感」の項目の前後・経年比較 ・事後アンケートの自由記述欄への記載事項の分析
<p>System</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係者が熟議し構築する持続可能な活動体制 ・教職員全員が活動内容を理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回学校運営協議会における総合アドバイザー、CSコーディネーター、校内担当者からの年次反省の報告事項 ・学校運営協議会委員及び関係者からの意見聴取 ・校内研修会・職員会議等における校内体制に係る意見交換と年次計画・役割分担等の改善状況

3 今年度（令和5年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	総合探究打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決グループ討議[2年:4~6月] ・トークフォークダンス①[1年:5月] ・地域人材インタビュー[1年:6月] ・地域PR動画作成講義[1年:6月] ・中間発表[2年:6月] ・グループ動画・ポスター製作[1年:7~9月] ・探究フィールドワーク[1・2年:7~8月] ・総合探究中間発表[1年:9月] ・総合探究中間発表[1年:9月] ・総合探究成果報告[1年:10月] ・インターンシップ・報告会[1年:10月] ・総合探究成果発表[2年:11月] ・動画・ポスター英語発表[1年:12月] ・探究成果の町議会提案[2年:12月] ・他校交流[1・2年:12~2月] ・2年総合探究論文作成[12月] ・2年海外研修で英語発表[1月] ・トークフォークダンス②[1年:3月]
5	総合探究打合せ	
6	第1回学校運営協議会会議	
7	総合探究打合せ	
8	総合探究打合せ	
9	総合探究打合せ	
10	総合探究打合せ	
11	第2回学校運営協議会会議	
12	総合探究打合せ 北海道CLASSプロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」	
1	総合探究打合せ	
2	関係者総括会議	
3	第3回学校運営協議会会議 探究イベント「とかち創生学の日」	

資料 本6

4 自走可能な体制整備に向けた方策

- ・校内委員会を定期開催し、総合アドバイザー、CS コーディネーターとの打合せ内容や計画の変更等を教職員に周知する。
- ・学校運営協議会主催で研修会等を開催し、広く参加を呼びかける。
- ・探究コーチを経験者と新規者のペアとし、経験者の持つノウハウを伝承する。
- ・地域から探究サポーター」を募集し、教育活動への地域住民の参画を促す。
- ・学校運営協議会から役場に働きかけ、広報誌に「とちかち創生学」のコーナーを新設する。
- ・探究イベント「とちかち創生学の日」の内容を工夫・改善し、参加者を増やし活動の認知度を高める。
- ・地域おこし協力隊員（CS 推進員）の人材を確保する。

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

- ・本校の探究成果発表会に、推進校の地域コーディネーター、コンソーシアムメンバーがオンラインで参加し、講評・助言をいただく。
- ・北海道 CLASS プロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」で生徒・担当者交流を行う。
- ・管外の地域連携校との探究活動交流を行う。

6 学校独自の取組・工夫

- ・チラシ等を通じて地域住民に呼びかけ、探究コーチ、課題提案等を担う「探究サポーター」を募集している。

7 その他特記すべき事項

- ・「総合的な探究の時間」総合アドバイザーとして、一般社団法人地域包括ケア研究所代表理事藤井雅巳氏からの定期的な指導及び助言を得る。

令和5年度(2023年度)全道地学協働活動研究大会
事例発表 (連携校部会)

北海道CLASSプロジェクト
「本別高等学校の地学協働活動」

～「とちかち創生学」を核とした地域とともにある学校づくりの推進～



北海道本別高等学校 教頭 小林 央
CSコーディネーター 石田 幸成
令和5年11月16日(木)

北海道 CLASS プロジェクト

Collaboration

地域や産業界等との連携・推進

Literacy

学んだことを将来に活かす能力

Adult

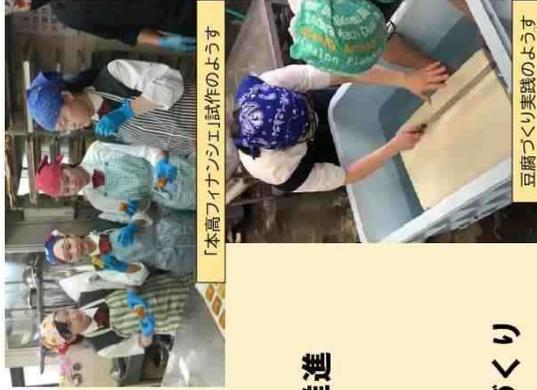
大人と子供が一体となった取組の推進

Student

生徒理解に基づく指導の充実

System

学校と地域の連携・協働の仕組みづくり



「本高フイアソシエ」試作の様子

豆腐づくり実践の様子

1 「とちかち創生学」の目指すところ System

○「とちかち創生学」の探究テーマ

- 1 正解のない課題に挑戦し探究し続ける力の育成
- 2 次世代に十勝を牽引し地域を支える力の育成
- 3 グローバルな視点をもって地域を支える人材の育成

自分で「考え」「決める」力を学ぶ

Literacy

1. 問題点を認識し課題を発見
2. 情報を収集し整理・分析
3. 解決策を検討し実践
4. 結果から新たな課題を発見

1年生のはじめに
目標として示す



総合アドバイザーによる講義

コーチを交えたグループ活動

2-1 CSのエンジンとなる各部会 System

○とちかち創生学部会 (探究活動)

- ・1年生：地域理解、地域課題の設定に関する探究活動
- ・2年生：地域課題解決に関する探究活動

○地域連携部会

- ・学校行事における地域との連携 (学校祭バザーへの商工会の協力など)
- ・地域貢献活動 (ボランティア, 地域イベントへの参加など)
- ・部活動など課外活動 (外部指導者参画の推進など)

○異校種連携部会

- ・国際理解教育・キャリア教育の推進
- ・小中学校との授業・課外活動連携の推進
- ・小中高の生徒間・教員間・P T Aの交流推進

R3:CSを機能させること

R4:コンソーシアム構築

R5:活動の持続可能性

本校のCSは
令和2年度から

すべての活動の「核」

R2:創生学の内容充実

2-2 CSの活動をコンソーシアムに拡大しながら展開



20231116 地学協働研究大会

5

2-3 「とちかち創生学」の特長



20231116 地学協働研究大会

6

2-4 「とちかち創生学」を「核」とした活動の広がり



20231116 地学協働研究大会

7

2-4 「とちかち創生学」を核とした活動の広がり



20231116 地学協働研究大会

8